

第二七話

ジグラット？ 有資格者の証？ タイムリミットが示されたというのに、相変わらずもって回った言い回しを選ぶとは。良く言えばブレないが、頑固というか、ただただ面倒くさいオヤジなだけだ。グレゴール氏の付き人、教団の関係者になるというのも、なかなか大変なんだろう。

助けを求めてそちらに視線をやると、彼は「ああ、えーっと」と間を繋ぎながら、言葉を整理する。

「ジグラット、聖塔はこの街で一番高い塔のことです。有資格者の証は、私にもよく分かりません」

また塔か。この街で一番高い塔となると、海の近くに立っているハチ公タワー。上空の先端を、肉眼で捉えたことは一度もない。先日は入れなかった内部から登れば辿り着けるのだろうか。

さつきから、ケータイを見ていた桂花さんが顔を上げた。

「次、月が南中に差し掛かるのは明日の朝、六時半ぐらい」

「タイムリミットには余裕があるけど、割とギリギリなのは怖いな」

駿の感想に僕も同意する。凍結の申請を出すチャンスがあるのは不幸中の幸いだけど、時間びつたりでなくても、条件が満たせることを願いたい。有資格者の搜索と協力要請が優先ではあるものの、こちら側だけで出来そうなことは、可能な限り準備しておかないと。実行までにほぼ丸一日待たなければならぬ辛さ、ドキドキ感もなくはない。

「で、有資格者の証は？」

駿は両手の人差し指で、空中に適当な大きさの長方形を描いた。掲げると言うからには何らかの形を伴った物体だろうけど、必ずしもそういう形状とは限らない。ただ、最近誰かから受け取って、最近も意外な働きをしたそういう形の物に思い当たる節がある。

僕は大きく荷物が入っていないカバンの中を探り、底の方から小さな板を取り出した。昨日も、なぜか関係者パスとして機能した交通系ICカードを掲げ、グレゴール氏に「これのこと？」と尋ねた。

「それと、アナタの遺伝情報です」

グレゴール氏はゆっくり頷き、情報を捕捉した。

「要するに、僕がコレに触れた状態だと証になると」

グレゴール氏は、もう一度頷いた。そういえば昨日も、僕の手でパネルにタッチしたっけ。他の誰かが触っていたら、セキュリティは解除されなかったのか。

ただの「カードだ」と思ったのに、どんどん意外なアイテムになって行くな。どこへでも行ける万能感、信頼感が一人で増して行くのも興味深い。周囲の状況を忘れ、一人の世界でカードの裏表をしげしげ眺めていると、僕らが鍵を下ろした扉が、外側から蹴破られた。急な物音に驚いてそちらに目をやると、米利刑事がSATみたいに武装した同僚を伴って中に入ってきた。

彼は織林刑事に声を掛け、警備ロボットの事後処理や現場の治安維持から、自分の仕事へ移るように言った。彼女は「えー、急にそんな」と不満な声を漏らしながらも、彼の後について、僕らの方にやって来た。特殊部隊めいた警官は、現場の市民を守るべく周囲を警戒している。

さっきから続いている物々しい雰囲気、より一層引き上げられたんだなど、米利刑事の表情からも伝わってくる。

「話は付いたか。付いたなら、さっさと動くぞ」

米利刑事は、グレゴール氏の方を見た。

「あんたらは？」

付き人の男性が、代わりに首を振った。米利刑事は、近くに居た警官の肩を叩くと、「後は頼んだ」と言った。警官の返礼を軽く流し、「さ、早く」と僕の背中を叩いた。

「何をそんなに急いでんだよ」

米利刑事に駿が声を掛けるものの、彼はそれには取り合わず窓の方を見ながら、サスペンダーのようなショルダーホルスターから銃を抜いた。セーフティを外し、織林刑事の背中を押して、僕らの方に押しやる。

「走れっ！」

米利刑事の突然の怒号に、流石に織林刑事も指示や状況が飲み込め切れていない様子で、何やらぶつくさ言っている。米利刑事はこちらのことなど一顧だにせず、窓をぶち破って内部に侵入したそれに向き合い、僕らとの間へ割って入った。礼拝堂の中が再び騒然とする。状況をなんとなく察したららしい織林刑事は、桂花さんの手を引いて「こつち」と、教会の奥へ走り出した。

その後ろを追いかけながら、一瞬米利刑事の方へ視線をやると、彼は襲撃者の攻撃を、礼拝堂内の長椅子等を上手く使ってかわしていた。周囲の特殊部隊の助けも借りながら、無発砲で僕のすぐそばまでやって来る。

「ほら、早く行け」

彼は僕の後ろに着き、礼拝堂へ続く扉を閉めた。米利刑事が一番後ろについて背後を警戒し、織林刑事は先頭で行く先の安全を確保する格好になった。その間は、一番足の遅い僕が最後尾で、駿、桂花さんの順となっている。

「そっちじゃない、裏口だ。外へ出る」

先頭の織林刑事が丁字路で駐車場の方へ向かおうとしていたのを、反対へ向かえと米利刑事が指示を出した。このまま表に出してしまうと、駐車場へは若干の遠回りになる。織林刑事は一瞬足踏みするものの、先輩刑事の指示に従って、表へ通じる裏口へ進む。

教会の外、木津川に面した細い通りへ出ると、駐車場の方から爆発音が聞こえて来た。そちらへ目をやると、雨の向こうに黒煙が立ち上っているのが見える。

「立ち止まるな。走れ」

小雨が降りしきる中屋外に出て、爆発音に立ちすくんでいた織林刑事に、一足遅れて外に出てきた米利刑事が怒声を浴びせる。

「走れって、どつちに？」

「ちよつとは考えろ。演算装置は飾りじゃないんだろ？」

米利刑事が自分の頭を指で叩くと、織林刑事は「ハラスメントが酷いって、本当に訴えますからね」と言い返した。彼女は隣接する小学校の方をパッと見て、大きく息を吐く。深呼吸で気持ちを切り替えたらしく、顔を上げると「さ、行くよ」と一方通行に逆らって走り始めた。彼女が背を向けた方向に、旧型のロボットの交えた怪しい集団が見える。

小雨とは言え、雨の中で傘もささずに走っていると、段々靴の中に水が入って来て気持ち悪くなってくる。カバンの中に傘も入ってはいるが、視界確保と運動性を犠牲にしてまでやることではない。

さつきから見えていた大きめの通りにぶつかつた。左は川口の交差点、右は木津川橋。車の往來を無視して直進するのは避けた方が無難に思える。どつちに進むべきか迷っているうちに、殿を務めていた米利刑事に追いつかれた。

「これはどつちに？」

「とりあえず、中央市場の方だ。西署の方が近いが、市場前の交番へ向かえ」

僕の質問に米利刑事が答えている間、駿は彼の腰あたりをモゾモゾ触った。米利刑事に「何してるんだ」と聞かれる前に、折りたたみ式の警棒をくすねた彼は、ストラップに自分の手首を通しながら、「ちよつと借りるぜ?」と言った。

彼は警棒を伸ばし、軽く素振りをする。風を切る音が聞こえて来た。

「戦力は多い方がいいだろ?」

「無茶はするなよ。過剰防衛の擁護は保障しかねる」

駿は軽い調子で「了解」と答えた。僕らのやり取りを他所に、車の往来をジッと見て、通りの真ん中で道を塞いだ織林刑事は、「早く渡れ」と手招きをした。桂花さんは一足先に通りを渡り切っている。

よくよく見ると、木津川橋の向こうにも、いかにも怪しい人たちが集合しつつある。このまま真っ直ぐ、道路を突っ切るしかなさそうだ。駿を先に行かせ、僕はその後を追いかけた。桂花さんと合流し、後ろから来る刑事二人を待った。駿と桂花さんは、僕を置いてどんどん先に進んでいる。

中央市場へ向かうには、ここから橋を二本渡る必要がある。どの程度の情勢かはまだ掴めていないが、川の上で道幅が細くなるのは、若干心許ない。

織林刑事は僕を追い越し、駿と並んだ。桂花さんを自分達の後ろに隠した。

「なあ、お前もなんか、武器無いかよ」

前を警戒している駿が、僕に向かってボソツと言った。そんなもの、ある訳がない。

「キャラじゃないのは分かるけど、ちよつとぐらい漢を見せてやれよ」

駿の言いたいこともよく分かる。彼のようなキャラクターでなくても、こういうシチュエーションでビクビクしてるだけなのは、我ながら流石にどうかと思う。武器なんて都合のいいもの、ある訳ないよなと思いつながら、雨粒が入るのも構わずカバンを探った。棒状の目ぼしいもの、さつきは取り出すのを諦めた折り畳み傘がある。

「守ってもらわなくても、結構ですけど」

傘は、僕が手に取る前に、横から覗いていた桂花さんによって持って行かれた。彼女はそれを確かめながら、ちよつとだけ柄を伸ばしてステッキのように軽く振る。

「私の方が、多分強いし」

彼女は僕を見てニヤニヤ笑う。それに対して取り繕う暇もなく、一つ目の橋が見えてきた。唯一の武器候補も取り上げられてしまった僕は、手持ち無沙汰にた

ただただ小雨の中を移動するだけだった。

初出 令和四年一月五日 noteにて公開